●特別寄稿

ヨーロッパ的家族発展

―個人化と自己同一性―

M・ミッテラウアー(1)

(森謙二・訳)

第三八回ドイツ歴史家大会は「歴史における同一性」の共通テーマで行われる。このテーマ設定は、それを「歴史を通じての同一性」の問題と結び付けるならば、理論や研究における我々の具体的な仕事にとって、特に実りあるものにすることができるであろう。要するに、私の報告においては、歴史へのどのような接近法(Zugangsweise)が自己同一性の発展を裏付け、促進することができるのか、その問題が重要なのである。歴史科学と歴史を媒介するもの(Geschichtevermittlung)は伝統的に集団同一性の裏付けや養成に強く方向つけられていた。二〇世紀のヨーロッパにおける加速される個人化の過程とともに、自己同一性の養成の歴史は、ますます価値を高めており、我々は歴史家として考慮にいれるべきであると、私は思う。個人化の過程は、ヨーロッパの歴史に深く根をおろしている。疑いもなく、その過程はヨーロッパの社会的特殊性に属するし、それ故にヨーロッパ的同一性と密接に結びついている。私は、特殊ヨーロッパ的家族発展を背景した個人化の過程の基礎のうちの二・三について述べることにしたい。この出発点から私の報告「歴史と自己同一性」の目標にいたる道はるかに遠い。そのために、二・三の包括的なテーマ、メモ的な示唆、スケッチ風の展望に限定をしなければならない。

1　歴史的家族研究は、過去数十年においてヨーロッパ領域における家族発展のいくつかの特殊性を明確にした。そのよう

な特殊性としてたとえば次のようなものをあげることができる。文化間の比較において、とりわけ婦人の、しかしまた男性の相対的に高い婚姻年齢、――文献においては「ヨーロッパ的婚姻パターン」というレッテルをはられる――、若い夫婦の新地での定住（neolokale Ansiedelung）[2]の優勢、共同生活の端初的な秩序としての世帯と家族の高度な柔軟性、血縁秩序と親族体系の相対的にわずかな意味、「複合」家族との比較における「単一」家族の優越、世帯と家族における非親族の人々の、とりわけ奉公人の頻繁な同居（häufige Präsenz）。奉公人制度は二〇世紀にはその社会的意味をほとんど失っているにもかかわらず、家族構造のヨーロッパ的特殊な発展にとってはきわめて重要であろう。いわゆる「生活サイクル奉公人」（life-cycle-servants）[3]の制度は、今日の研究状況に従えば、一つのヨーロッパ的特徴である。それは、婚姻年齢の高さやネオ・ローカリズム（Neolokalität）のようなすでに述べた他の構造的な特質と関連する。それは、血縁秩序から家族構成が離れていく典型的なヨーロッパに特殊な特徴の表現形式である。それは、現在にまで作用している労働組合や教育制度における若者期のさまざまな形態化形式（Gestaltungsformen）のとりわけ重要な前提である。いわゆるヨーロッパ的家族発展に性格づけられた特質は、地域、社会階層によって、そして都市―農村の格差のなかで生じた非常に大きな違いをともないつつ形成され、かつ広がった。ヨーロッパは広い領域であり、とりわけ大陸の東あるいは南東では、その特質は一般的に現れないかずっと遅れて現れる。その特質は、地理的統一体としてのヨーロッパではなく、社会空間としてのヨーロッパにおいて典型的なのである。その特質は、ヨーロッパ化の過程によってさらに大陸を越えて影響を及ぼした。

2　ヨーロッパ的家族発展の構造的特質を引き起こす諸要因は、その構造的特質ほど明らかではない。広く流布しそして多くの議論をもたらしたテーゼは、――（それは）イギリスの社会人類学者ジャック・グーディーによってとりわけ代表されたのだが――ヨーロッパ的な特殊な発展の発端を、ローマ教会による財産蓄積のために公布された、四世紀以来一層厳しくなった内婚的婚姻の禁止に求めた[4]。私は個人的にはこの立場に立たないが、しかし家族発展のヨーロッパ的な特別な道における キリスト教の影響には大きな意義を見いだす。決定的な点は、改宗宗教としての初期キリスト教の特殊な性格にあると、

私は思う。キリスト教はその性格を古典古代の他の宗教運動と共通にもち、そのために強く血縁に方向付けられた宗教とは区別されることになる。宗教的に基礎づけられた血縁思考の克服があって、はじめて労働組織の要素がヨーロッパ家族史のなかで非常に重要な意義を獲得することが可能になった。それは、近代史のなかでのヨーロッパの家族形態の多様性を規定するものであり、また労働組織としての家族の経済的諸形態を越えて今日まで影響を及ぼしている。もとよりそれをもってヨーロッパ家族発展の長期に影響力のある条件付きの要因の一つが語られたに過ぎない。このような諸要因についての問題は、歴史的家族研究にとって特に重要な課題であると、私は思う。それによってヨーロッパの他の特殊性もまた充分に説明されるであろう。もちろん、それは近過去に制限されるわけではない。もしヨーロッパの社会的特殊性を——たとえば家族発展の領域において——素描を越えてより詳しく説明しようとすれば、時代優先的な歴史的縦割り断面における(im epochenübergreifenden historischen Längsschnitt) 接近法を必要とする。

3　家族発展のヨーロッパの特殊な道と同一性形成の過程の間の諸関連についての問題は、この文化空間における若者期の形態の特色にも関わることである。子どもから大人への道はここでは特別に長い。出身家族 (Herkunftfamilie) への強い依存の期間と自分自身の家族ないしは所帯創設の間で、家族への依存が緩められ、ますます個人的な自律 (Autonomie) が増加する期間が現れる。それは、社会的環境によってとりわけ性によって非常に異なって形態化されるが、全体としてはしかし自立的な展開と個人化の特殊なチャンスを開くことになる。ヨーロッパにおける若者の歴史にとって、キリスト教＝ヨーロッパの伝統のなかで性的成熟に続いて起こる包括的な成熟宣言が大人の生活の全ての領域において欠如しているということが特徴である。次第に生じる部分的な成熟宣言、それは生活周期の長い期間にわたって広がってくるものだが、その多様性が包括的な成熟宣言に代わることになる。近代においては、学校ないしは教育・養成制度は、いっそう広範囲の住民団体のための学校化のプロセスとともに、段階区分の基本的な役割を引き受けてきた。もとより、多くの本質的な切れ目は外部にある。たとえば、我々が運転免許証について考えるとすれば、それは二〇世紀末期のヨーロッパの代替成人儀礼である

若者はより強く差異化される移行と切れ目の連続として、境界つけと組入れの次第に多様になっていく過程の連続として現れる。この連続はこれらの複合的な形態のなかでのヨーロッパ的社会発展の一つの特殊性である。[5] すでに述べたヨーロッパ的家族制度の特徴は、若者期の形態化とある因果的関連――部分的には原因として、部分的には結果として――のなかで見るべきである。高い婚姻年齢は、長い養成期間の必要性または所帯創設のための長い貯蓄期間の必要性の表現でありうる。逆に、社会的に規格化された婚姻年齢の高さは、他の家での養成と奉公によってしのがなければならない待婚期間の条件となりうる。条件の関連をどのようにみるべきか、家族のヨーロッパ的特殊な発展にとって、子どもの時代の強い家族的統合とあるいは大人になっての強い家族的統合の期間との間には、相対的に長い期間があるということが特徴であり、その期間は非家族的集団化との結びつきが大きな役割を果たす。高い婚姻年齢と並んで高い独身率は、ずっと過去のさかのぼることができる「ヨーロッパ的婚姻パターン」の断面である。大人としての地位は必ずしも婚姻の締結や家族創設を必要としないという、ヨーロッパ文化空間における長い伝統がある。このサンプルは二〇世紀の経過のなかでヨーロッパにおいて非常に大きな意味を持っている。家族的依存が緩められているという、伝統的な、移行期間としての若者の典型的な状況は、それ故に、多くの若者にとって一生のコンセプトになる。

4　ヨーロッパ的家族発展の文脈のなかでの若者は、雇用、価値観、行動パターンにおいて両親とは異なった方向に向かうという可能性を一般的傾向として増している。これに関して、家族と並んでの代替の社会化機関(Sozialisationsinstanz)、すなわち過去においては（in hitorischen Zeiten）さしあたり若者集団の様々な形態が、それからだんだん学校制度が決定的に重要な意味をもつようになる。代替の方向付けの提供はこのような face-to-face-groups の直接的な接触において生じうるが、しかし同様に文章や視覚のメディアを通じての間接的な手段によっても生じる。社会的な差別化、増加するグループの並存と変化する情報可能性（Informationsmöglichkeit）――特に都市の環境において――、これらは見出し語句にのみ枠条件としてあげられるであろう。また、二〇世紀の経過を通じて非常に大きな加速を経験した若者期の動態は、出

身家族にたいしての代替的な方向付けの要素として考慮にいれなければならない。伝統的には、それは青年期の女性よりも男子に非常に強い作用を及ぼしている。これに関して、現在では性間の平均化の徴候が現れているように思われる。若者期の自主的な方向付けは――性や社会環境によって大きな差があるが――単に現実的な可能性があるに過ぎないのではなく、それは若者の社会的コンセプトの養成において、この生活期において達成されるべき規範的な目標になる。若者は近代のヨーロッパの歴史のなかで、課題としての個人化と個人的な自律性の獲得と根本的に結びついているように思う。

5　ヨーロッパの社会史にとって非常に特徴的な個人化という過程は、長期的には比較的明白で、ほとんど異ならない役割秩序付けを伴った単純な集団同一性の解体を導き、そして複合的な同一性の構造、――その内部では非常に異なった集団的かつ個人的な同一性が相互に協定しているはずである――の構築にいたる。個々人が所属する第一次的集団ととりわけ第二次的集団の数が比較的最近においては非常に増加するだけではなく、このような集団における個々人の立場もまた伝統的な役割コンセプトの単なる引継を通じてだけではもはや満足させることが出来ない。このような発展は、依然としてもっとも重要な第一次的集団、すなわち家族のなかで特に明らかになる。性や世代によって違いがある伝統的な役割の形象は、日常の活動においてその大なる重要性をますます消失している。妻、夫、母、父、子供、兄弟、姉妹として存在することが家族体系や家族体系の発展期間のなかでいつも何を意味しているかということは、以前よりずっと強くたえず繰り返して新たに規定されなければならない。家族諸関係と家族の責任、共同体行為と共同体意識は、それぞれの集団ごとに様々な方法で形態化される。労働世界や余暇の領域における第一次的集団にとって、同じことが、地方のレベルにおいてあるいは結社組織において、なお一層、過去において同一性を強く刻印するたとえば宗教的共同体のような包括的な社会組織においても、有効である。個々人にとって結合力を失っていく、このような様々な集団同一性の緊張の場において、同一性形成の過程において均衡した自己同一性に到達することはますます難しくなる。その際、自己同一性というのは、個人化過程の成果を越えて、個人的な機関（Instanz）と理解されるべきである。それは、個々の同一化と解放とに批判的に対決しながら全体性への統

合をはかり、そしてこのような過程を内省しながら、その統合を自らが意識した統一体へ結びつける。

6　同一化と解放の個人的な発展過程についての内省は、過去の生活史的な描写のなかで捉えうることができる。だから、この型の文献（Quellentypus）の成立、展開、拡大は個人化あるいは自己同一性の養成の社会的な傾向を反映する。たしかに全ての日記、全ての自叙伝が、前に述べた統合管理に成功した、内省した人格の表現ではない。けれども、このような自己の人生の旅路を内省する自己証言の出現は、一定の社会環境において、あるいは一定の文化空間において、このような内省についての欲求が生じるという状況証拠としては、一般的に価値をもっている。日記や自叙伝が、個人化と自己同一性の養成が問題となる、そのような時代において、そして社会階層において、そして社会階層において、文学ジャンルとして偶然に成立した訳ではない。両者はその成立にしたがえば、同一性形成の期間としての若者期をその中心のテーマとしている。直接的な随伴のなかでの日記と包括的な回顧としての自叙伝。ますます、生活史的証言がその本来の市民の成立環境を超えて、さまざまな社会のグループのなかで行われるとすれば、そのなかに、個人的な人生の旅路を熟考することがますます欲求として感じられているということが示されているだろう。とすれば、生活史的な自己証言の制作は、社会的な発展過程の一つの指標として現れる。このような内省過程が文書として現れるかどうかは別としても、個々人の生活にとってはそれらはますます重要となる。生活史の研究に従事することは、自己同一性を発展させるため、つまり同一化の歩みのなかで起こってくる亀裂あるいは誤った展開を修正するためにも、ますます意味をもつものと思われる。

7　それぞれの生活史は、自分自身の体験ないしは固有の体験からもたらされる意識を超える、という条件に規定される。自己同一性の展開に自分自身の生活史の内省している必要としているというテーゼが正しいとすれば、その自己体験を超えた諸条件をともに内省することが重要である。歴史の伝達にとって、そして間接的にはまたその研究にとっても、そこから追加された課題が生じる。国家的、国民的、おそらくまた超国家的な共同体の平面での集合的な同一性を歴史から発展させ

支える伝統的な諸形態は、この個人的な欲求を正当に評価するものではない。国民意識やあるいはヨーロッパ意識は、自己発見の困難さのなかではほとんど役に立たない。どちらかといえば、自分自身の生活史の内省のなかで次のようなことを意識することが先に進む助けとなる。たとえば、自分自身の家族や社会環境の中で範を示した性役割のひな型は何千年もの古い発展の所産であり、繰り返し背景を問わずに完全に変化した枠条件のもとで後生に伝えられている。日常生活に重要な歴史的人類学のほんの二・三の例示をあげてみても、生殖行動、子供関係、家族的共同生活あるいは老人扶養のテーマについても同じことがあてはまる。そのように歴史を研究するということはたしかにまた同一性をもたらすことである。もちろん、国家的、国民的、超国家的同一化と関係づけられた形式とは全く異なった様式において。日常生活の表面的な自明性は、それによって疑問が提示され、自然的であると信じられた現象が社会的なものとして限定されてみなされる。このような相対化が、新しい方向付けを可能にする。（そうすることによって）伝統的な役割ひな型への距離がつくられるしそして基礎づけられうるのである。たしかに個人的な自律性と自己同一性の養成のなかでの一つの本質的なファクターである。歴史人類学的背景において、個人の生活史の内省を可能にするためにどのような媒介手段が必要であるかは、ここでは詳細に論じることはできない。そのためには、新しい教授法的な構想も必要であるだろう。文化間の比較において、ヨーロッパ的社会発展の特殊性を意識するとき、内容的にはこの種の本質的なテーゼが言及されているのである。それは、個人主義、合理性、個人的自由の観念といった、このようなヨーロッパ固有の価値・特殊性についての知識からヨーロッパ人の我々意識を得ようとするためではなく、それとは全く異なった、自分自身の生活のなかでの重要性において、これらの伝統を再点検することを可能にするために、である。

訳注

（1）ウィーン大学社会経済史研究所教授、ドイツ語圏の家族史研究の中心人物となっている。主な著作は次の通りである。

1 Mitterauer/Sieder, 1977 (1984), Vom Patriarchat zur Partterschaft-Zum Strukturwandel der Familie, München

2 Mitterauer, M., 1979, Grundtypen alteuropäisher Sozialformen, Stuttgart.

3 Mitterauer/Sieder, 1982, Historische Familienforschung, Frankfurt

4 M. Mitterauer, 1986 Sozialgeschte der Jugend, Frankfurt.

5 M. Mitterauer, 1990, Historische Anthoropologische Familienforschung —Fragestellung und Zugangsweisen—, Wien.

また、ミッテラウアー教授の家族理論の紹介としては、三成美保「西欧前近代の家族に関する研究の現状」『法制史研究』三八（一九八八）、若尾祐司「近代ヨーロッパの家族と親族—ドイツを中心に」『シリーズ　世界史への問い4　社会結合』（岩波書店、一九八九）、森明子「ヨーロッパ家族史研究における「家族」概念をめぐって——ミッテラウァーを中心として」『歴史人類』一八（一九九〇）などがある。このなかで、1と5については、近い将来、名古屋大学出版と新曜社で翻訳の予定がある。また1の一章についてはすでに翻訳がある（高木正道訳「工業化以前の大家族についての神話」『静岡大学教養部研究報告』二〇—二（一九八五））。なお、ここで訳した原稿の原題は、“Europänische Familienentwicklung, Individualisierung und *Ich-Identität*” である。

（2）結婚をした夫婦が親から独立をして新しい世帯を形成する原理＝ネオローカリズム（Neolokalität）、このような原理が支配する地域においては、結婚は原則として晩婚となる＝「ヨーロッパ的婚姻パターン」。

（3）人生のなかで一定の期間＝若者期に奉公人としての生活を送り、独立した世帯形成の準備期間となる。

（4）M. Mitterauer, 1990, S. 47ff. グーディについては次の文献を参照。J. Goody, The development of the family and marrige in Europe, 1983.

（5）M. Mitterauer, 1986, S. 50.